

フッサールの発生的現象学に関する先行研究の整理と比較検討
—— 方法論的問題を中心に ——

Survey of Previous Studies on Husserl's Genetic Phenomenology:
Focusing on Methodological Issues

佐 藤 大 介
SATO, Daisuke

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第60号 2025年12月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.60 2025

フッサールの発生的現象学に関する先行研究の整理と比較検討 ——方法論的問題を中心に——

佐藤 大介*

はじめに

フッサールは1920年代に自身の現象学を、静態的現象学と発生的現象学とに分け、これらにおいて展開される分析をそれぞれ、静態的分析と発生的分析と呼んでいる。こうした区別や呼称は、例えば『デカルト的省察』第四省察や『形式論理学と超越論的論理学』附論2に登場する。しかし、これらの現象学についてフッサールは、公刊著作でそれほど体系的に論じておらず、草稿の中でより豊富な議論を展開している。ただし草稿での論述も、断片的であったり公刊著作の議論との連関が不明瞭であったりすることがしばしばあり、また、これはあくまで草稿として残されたものである点が、考慮されねばならない。こうした事情が、上の区別に関する解釈を難しくしている。

これまでのフッサール研究において、静態的現象学についての解釈は概ね共有されているのに対し、発生的現象学についての解釈は、先行研究の間でそれほど共有されているわけではなく、未だ論争的となっている。静態的現象学について言えば、これは、すでに出来上がった意識体験を分析の主題とするものだと、理解されている¹。すなわち静態的分析では、意識の動的な過程ないし時間性は着目されない。これに対して発生的分析は、静態的分析と対比的に、意識体験がどのようにして出来上がっていくのかを主題的に探究するものだと、さしあたり理解できよう。しかし、そのより詳しい内実に関しては、本論（特に第2節）で詳しく確認するように、各先行研究においてそれぞれ異なった解釈が展開されている。

本論の目的は、発生的現象学に関するこれまでの解釈を整理し、比較検討することである。より具体的に言えば、本論では特に、先行研究が論じる発生的分析の方法論の問題に焦点を当て、整理と比較検討を行なう。そのために本論では、次の手順で考察を進める。まず、発生的現象学について概説したものとして、イゾ・ケルン「静態的構成と発生的構成」、ヤグナ・ブルジンスカ「発生的転回——体験の具体性へ向かうフッサールの行程」を取り上げる（第1節）。これらを整理することで、フッサール研究において概ね共有されている、発生的現象学の大枠が確認できる。次に、発生的分析の方法論の問題について論じたものとして、ナミン・リー『エトムント・フッサールの本能の現象学』、榊原哲也『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』、セバステイアン・ル

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科客員研究員

¹ 本論で扱う先行研究は、これを次の箇所でも示している。Kern [1989, 182–183, 186]、Brudzińska [2021, 130–132]、Lee [1993, 18, 21–22]、榊原 [2009, 313–314]、Luft [2016, 339–340, 352–353]、Plotka [2022, 135–136, 139]。

フト「再構築と還元——方法と主観性への問いに関するナトルプとフッサール」、ヴィトルト・プロトカ「静態的分析と発生的分析の隔たりをどうやって埋めるかに関するフッサールの考察」を取りあげる（第2節）。これらの先行研究はそれぞれ、上の問題に対して注目すべき応答を呈示したものである。そしてここまでの整理を踏まえて、先行研究の解釈に関して改めて検討すべき点を示す（第3節）。

なお、これまでのフッサール研究ではしばしば、フッサールの思索の発展史という観点から、発生的現象学がいつ頃構想されたのかが論点となってきたが、本論ではこれには立ち入らない²。

第1節 発生的現象学の概要

本節では、発生的現象学の概要が先行研究においてどのように呈示されているのかを整理する。それを呈示した古典的な研究としては、イゾ・ケルン「静態的構成と発生的構成」が挙げられる。同論文での解釈は、ザハヴィやブルジンスカが指摘するように、フッサール研究において長らく標準的なものとして受け入れられてきた（cf. Zahavi [2003, 142–143]、Brudzińska [2021, 130]）。また、近年では、ヤグナ・ブルジンスカが「発生的転回——体験の具体性へ向かうフッサールの行程」において、フッサール研究の進展を踏まえながら、発生的現象学の概要を呈示している。これらの論文は、概説書ないし入門書の一部をなすものとして執筆されている。それゆえ、そこでのケルンやブルジンスカは、発生的現象学の概要を簡明に述べてはいても、必ずしもそれに関する踏み込んだ解釈を示そうとしたとはかぎらない、という点に留意しておくべきだろう。

なお、本節では、①発生概念、②発生的現象学の課題、③発生的分析の方法、これら3点に着目して、先行研究が呈示する発生的現象学の概要を整理する。すなわち、①では、フッサールにおける「発生」という概念がそもそもどのようなものなのかについて、②では、発生的現象学の目的、言い換えれば、発生的分析が何を明らかにしようとするものなのかについて、③では、発生的分析がどのような方法で行われるものなのかについて、先行研究の解釈を確認する。これらに着目することで、先行研究が解釈する発生的現象学の概要を、より掴みやすくなるだろう。

² 本論で取り上げる先行研究において、発生的現象学の構想された時期についてどのような見解が呈示されているのかをごく簡潔にまとめると、次のようになる。ケルンはその時期を、1917年から1921年の間と見定めている（cf. Kern [1989, 181, 185–186]）。リーは、その時期が少なくとも1916–17年には始まっていたと、考えている（cf. Lee [1993, 24–25]）。榊原はその時期を、1912年頃から最晩年に至るまでだと論じている（cf. 榊原 [2009, 232, 236, 338]）。ブルジンスカは、その時期が1910/1911年の『現象学の基本問題』の講義において早くも始まっていると、論じている（cf. Brudzińska [2021, 130, 132–133]）。ルフトは、その時期を明確に述べていないが、その構想にあたっては、1880年代に始まるナトルプからの影響があったと論じている（cf. Luft [2016, 355]）。プロトカは、その時期を確定するのは難しいと考えている（cf. Plotka [2022, 131]）。

1.1 ケルンによる概説

イゾ・ケルンは、「静態的構成と発生的構成」³で、フッサールにおける発生的現象学の概要を呈示している。さしあたり述べておくと、同論文では、とりわけ発生概念が丹念に呈示されており、これがその後のフッサール研究においても広く共有された。しかし、発生的現象学の課題や方法に関する同論文での解釈は、その後のフッサール研究と比較するとそれほど充実したものとはなっていない。なお、同論文のタイトルにある「構成 (Konstitution)」とは、簡潔に言えばフッサールにおいては、どんなものごととも意識との相関関係において現れ、何かしらの対象の意味（例えば「現実の机」や「想像上のコップ」）において捉えられることを指す (cf. I, 79–80; III/1, 196, 198, 313)。フッサールの構成概念については、さらに立ち入って規定することもできようが、ひとまず上のように規定しておいても、以下の議論で大きな支障は生じないだろう。

① 発生概念

フッサールにおける発生という概念は、自我および自我が関わる対象が具体的な歴史をもって時間的に成立ないし生成することを本来的には意味すると、ケルンは解釈している (cf. 181, 184–185/280, 285–287)。ケルンは次のように論じている。自我は形式的で空虚なものではなく、具体的な習慣性をもつものだと、フッサールは考えるようになった。ここでの習慣性とは、以前の経験によって獲得され、現在の経験可能性に影響を与えうる能力ないし確信を指す。例えば、自我が事物を経験する際には、以前の事物についての経験を踏まえて、その対象が引き続き空間的にどのように現れうるのか（それが「コップ」であれば、その底面が現に見えていなくても、それをひっくり返せばその底面が現れるというようなこと）が予描されている。こうした習慣性は、これまでの経験によって獲得された、具体的な起源や歴史をもつものであり、そしてこの歴史は、自我のもつものであると同時に、自我の関わる対象のもつものである。このような歴史的なものの生成こそ、フッサールにおける本来的な発生概念だと、ケルンは解釈している。

ただし、ケルンによると、フッサールは発生という語を、本来的ではない意味でも用いている。ケルンはこの非本来的な意味として、次のような三つのものを挙げている。

一つ目の非本来的な発生概念は、或る対象を証示するために辿るべき、意識の規則的経過の体系を指すものである (cf. 182–183/281–282)。フッサールによるとその体系は、対象の意味によって予描されている。例えば、眼前の対象が「サイコロ」として捉えられており、今その1の面・2の面・3の面が現れている場合、「サイコロ」という意味に従って、その対象には残り三つの面が

³ Kern, Iso [1989]: “Statische und genetische Konstitution,” 7. Kapital, in: *Edmund Husserl. Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner Verlag, 1. Aufl., 1989. 2. Aufl., 1996. (千田義光・鈴木琢真・徳永哲郎訳『フッサールの思想』「第七章 静態的構成と発生的構成」、哲書房、1994年。) 本節に限り、同書への引用箇所および参照箇所の指示は、原著の頁数、邦訳の頁数の順にスラッシュで区切ってその項数のみ括弧内に入れ、文中に記す。

あり、そこにはそれぞれ4と5と6が印されていることが、その後の経験の進行において捉えられるはずだと、予描されている。たしかにこのような体系は、意識の時間的経過を指し示している。しかしそれは、すでに捉えられた完成済みの対象の意味において指し示されているもの、すなわち、静態的現象学の枠内で記述されうるものである。それゆえ、ここでの発生概念は、歴史的なものが生成することを指す本来的なものではない。

二つ目の非本来的な発生概念は、対象性の構成における階層秩序において、上層が下層に基づいて成立することを指すものである (cf. 183/282–283)。例えば、他者の構成、すなわち私とは別の、心をもった身体的物体という対象の構成は、その物体という空間的事物が構成されたうえで成り立つ。たしかに、フッサールはこのように上層が下層に基づいて構成されることを「発生」と呼んでいる。しかし、フッサール自身が述べるように、これは比喩的表現にすぎない。すなわち、その階層秩序において、下層は上層に対して時間的に先行していると考えられているわけではなく、ここでの発生概念は、時間的な成立ないし生成を指す本来的なものではないのである。

三つ目の非本来的な発生概念は、意識が時間的形態をもつことを指すものである (cf. 183–184/283–285)。たしかに、意識は流れとして、不断に生じるものである。しかし、この流れが、あくまで抽象的に析出された形式であるかぎり、それは具体的に何かが生成していることではない。それゆえ、ここでの発生概念は、具体的な歴史が生成することを指す本来的なものではない。

ケルンによればフッサールの発生的現象学は、以上のような非本来的な意味での発生ではなく、本来的な意味での発生に関わるものである (cf. 185–186/287–288)。ケルンが非本来的な発生概念を既述のように丹念に指摘したのは、フッサールの発生的現象学を理解するにあたって、非本来的な発生概念による誤解を未然に防ぐ意図があったのであろう。

さらにケルンは、本来的な発生が能動的発生と受動的発生とに区別されていることを、際立てている (cf. 186–187/288–289)。ケルンによればこれらはそれぞれ、次のようなものである。能動的発生とは、実在的な文化財（例えば芸術作品や道具）や理念的な対象（例えば論理的判断や数）についての意識の働きである⁴。この意識の働きはこれに先立って、意識主体である自我に受動的に与えられているもの（例えば感覚）を基礎としており、こうした基礎をもつことが、フッサールにおける能動性の定義となっている。このような能動的発生に対して、受動的発生とは、その受動的に与えられるものが、一定の法則性のもとで形成されてくることである。

ケルンによると、フッサールは受動的発生における法則性を「連合 (Assoziation)」と呼び、これについて踏み込んだ議論を展開している (cf. 187–188/289–290)。ここで連合には次の二つの形式があると主張されたことを、ケルンは際立てている。一つは、そのつどの今において意識されて

⁴ フッサールにおいては、実在的なものとは、事物をその典型例とするような、特定の時間や空間に位置づけられているものごとを指し、これに対して理念的なものとは、少なくともそのように時間空間的に位置づけられないものごとを指す (cf. III/1, 12, 58–60; III/2, 585–586)。

いる、共存ないし継起する様々な契機が、近接性や類似性や対照性に基づいて統一を形成したり、布置化されたりするという原理である。例えば、色のついた斑点の一群が水玉模様として統一を形成したり、個々の音が一つのメロディーを形成したりする原理である。もう一つは、或る対象が経験された際、以前の経験が触発的に呼び起こされ、この以前の経験との類似性に基づいて、対象の意味が捉えられるという原理である。すなわち、以前の経験において捉えられた意味が自我の習慣的獲得物となっており、この以前の経験と現在の経験との間に類似性が成り立つ場合には、習慣的獲得された意味が現在の経験の対象に転移される。このような原理の具体例をケルンは挙げていないが、『デカルト的省察』第五省察では、一度「ハサミ」というものを経験すれば、これと似たものを即座に「ハサミ」として捉えるようになるという例が、挙げられている (cf. I, 141)。なお、「ハサミ」が初めて経験されるように、或る類型的意味が初めて捉えられることを、フッサールは「原創設 (Urstiftung)」と呼ぶ (cf. I, 141)。

② 発生的現象学の課題

ケルンによると発生的現象学の課題は、自我および自我の関わる対象がもつ歴史を探究することである (cf. 185–186/287–288)。より詳しく言えばこの課題には、或る統覚の規則的体系が生成した歴史的ないし発生的な起源について、問い明らかにすることが含まれている (cf. 182–183, 185–186/281–282, 285–287)。フッサールにおいて統覚とは、対象を或る類型的な意味をもったものとして捉える意識の働きを指し、この意識の経過は既述のように、その類型的意味に応じた規則的体系として予描されている。こうした体系をそれまでの経験において形成されたものだと見定めたうえで、ここでの歴史が探究されるのである。さらに上の課題には、具体的なそれぞれの主観性（これをフッサールは「モノイド」と呼ぶ）がもつ個性の生成ないし発生について、問い明らかにすることも含まれている (cf. 188/290–291)。すなわち、その個性性を自我の習慣性によって成り立つものだと見定めたうえで、その習慣性の形成された歴史が探究されるのである。ただしケルンによると、以上で探究されるのは、歴史の事実ではなく、歴史の本質ないし本質法則である (cf. 186, 188/288, 291)。つまり、個別的な自我の歴史が事実としてどのように成り立ったのかではなく、歴史が生成する際に一般に成り立つ法則が、問われるのである。

③ 発生的分析の方法

フッサールは発生的現象学の方法論をそれほど十分に仕上げていないと、ケルンは見定めている (cf. 182/281)。とはいえケルンはその方法として、わずかに次のような手続きを読み取っている。まず、発生的現象学を始めるためには、静態的現象学が必要とされる (cf. 181–182/280)。静態的分析では、或る確固とした種類の対象を捉えた意識経過の規則的体系が、「完成済みの (fertig)」ものとして明らかにされる (cf. 182–183, 186/281–282, 287)。この成果を踏まえて発生的分析は、

その体系を「完成済みの」ものと見なすのではなく、生成したものと見なすことから始まる（cf. 186, 189/287, 292–293）。そして、先述の発生的現象学の課題が取り組まれ、その結果として例えば、能動的発生と受動的発生が析出される（cf. 186–187/288–289）。このようにケルンは、発生的分析の手続きを読み取っている。しかし、発生的分析の核心である、自我の歴史を分析する仕方は、フッサールによって十分に示されないままだと、ケルンは解釈しているのである。

1.2 ブルジンスカによる概説

ブルジンスカは「発生的転回——体験の具体性へ向かうフッサールの行程」⁵で、フッサールにおける発生的現象学の概要を呈示している。さしあたり述べておくと、同論文では、発生概念に関する解釈は、ケルンの解釈とおおよそ同様であるが、発生的現象学の課題や方法に関する解釈は、フッサール研究の進展を踏まえて、ケルンの解釈よりも詳しく呈示されている。

① 発生概念の規定

ブルジンスカによれば、フッサールにおける発生という概念は、経験ないし意識体験が時間的流れの中で出来上がっていくことを指す（cf. 131–133）。ブルジンスカは次のように解釈している。発生概念にとって重要な発見は、意識が時間的な関係としての流れをもち、そしてその中で意識は何かしらの動機づけの連関を法則性としてもつ、ということにあった。ここでの意識の流れは、あらゆる経験が可能となる場であり、どんな科学的説明にも先立つ、主観にとって内在的なものである。こうした意識流は、いつも何かに動機づけられながら出来上がっていく、歴史的なものだと、フッサールは見定めた。つまり、どんな経験も、内在的な時間性における歴史をもち、この歴史的脈絡の中で生成するものとして、理解される。こうした生成がフッサールにおける「発生」であり、彼はこれに着目することで、現象学的分析の研究領域を、静態的なものから根本的に拡張している。すなわち、フッサールは当初、そのつどの現在の経験を、歴史的脈絡から切り離された静態的なものとして主に扱ったが、徐々に彼は、その歴史も考慮に入れていこうとした。以上のように、発生概念は時間的観点から現象学的分析の射程を拡張させるものだと、ブルジンスカは読み取っている。

② 発生的現象学の課題

発生的現象学の基本的な課題は、経験ないし意識体験がどのようにして出来上がっていくのかを明らかにすることにあると、ブルジンスカは解釈している（cf. 132–133）。言い換えれば、その出来上がっていく過程がもつ動機づけの脈絡に着目し、ここで成り立っている法則性を明示すること、

⁵ Brudzińska, Jagna [2021]: “The Genetic Turn: Husserl’s path toward the concreteness of experience,” in: *The Husserlian Mind*, Hanne Jacobs (ed.), Routledge, 129–139. 本節に限り、同論文への引用箇所および参照箇所の指示は、頁数のみを括弧内に入れ、文中に記す。

これがその課題である。なお、フッサールにおける動機づけとは、簡潔に言えば、意識が精神的規則としてもつ「理由-帰結 (Weil-So)」の関係を指す (cf. I, 109; III/1, 101. Fußn. 1; IV, 220–222, 229; XIX/1, 32; XXV, 321)⁶。すなわち、どんな意識の働きに対しても、「なぜそのように意識したのか」と反省的に問うことができ、この問いに答えることで、その或る意識の働きを帰結させるように動機づけた何かしらの意識の働きが、理由として引き出されるのである。

フッサールは上の課題に、主に1910年代から1920年代にかけての自我論において取り組んでみると、ブルジンスカは論じている。彼女によるとこの取り組みは、具体的主観性 (モノイド) の個性を理解することに結びついている (cf. 134–136)。ここでの個性性とは、自我がそれ自身の独自の経験的歴史を持つことを指す。自我論における発生的分析では、こうした個性性がどのようにして可能になっているのかが分析され、それを可能にする構造として、自我の「習慣性 (habitualities)」が析出されるのである。

ブルジンスカによれば、さらにフッサールは、1920年代の終わりから晩年にかけての判断論においても、発生的な課題に取り組んでいる (cf. 136–137)。彼女は次のように解釈している。この判断論においてフッサールは、判断がどのように発生するのかを明示するために、前述定的な経験を取り上げる。ここでの前述定的な経験とは、述定的な経験、すなわち対象を「何」として類型的に捉える (例えば眼前の対象を「机」として捉える) 統覚が始まるための基礎となるものである。ここには、自我の能動性の最低段階として何らかの触発を受容しそれに注意を向けることや、類型そのものが予め形成されていることが、含まれている。これらは、発生的観点からは、自我の具体的な経験の文脈において理解されねばならない。というのも、触発の受容を含むどんな意識作用も動機づけの連関の中で生じ、また、類型そのものは自我の経験的歴史の中で形成されるからである。フッサールは、こうした前述定的な経験も明証的なものだを見定めた。すなわち、彼によると前述定的経験は、前述定的な段階のものとはいえ直観的に捉えられうるものであり、どんな明示化にも先立つ非述定的な明証性をもっている。以上のように、フッサールは前述定的な経験に焦点を当てて判断の発生について論じたと、ブルジンスカは理解している。

③ 発生的分析の方法

ブルジンスカによると発生的分析では、静態的分析の成果を手引きとして、「構築 (construction/Aufbau)」と「解体 (deconstruction/Abbau)」という方法が用いられる。彼女は次のように論じている。静態的分析では、対象の意味とこれを志向する意識体験の相関関係が、時間性を考慮に入らずに分析され、いわば静止した本質的構造として示される (cf. 130–132)。発生的分析では、この静態的分析の成果を手引きとしつつ (cf. 130, 137)、ここに時間的観点を考慮に入れて、意識体験

⁶ フッサールにおける動機づけ概念を詳しく論じたものとして、門脇 [1987] を参照。

がどのようにして出来上がったのかが分析される (cf. 133–134)。フッサールはこの際、「構築」と「解体」という分析方法を用いている (cf. 135)。構築という分析方法においては、経験の受動的な次元にまず着目し、ここから意識流のもつ原初的な動向を辿ることで、この動向が経験の生成においても影響を探究する。これに対して、解体という分析方法においては、すでに展開した経験に基づいて、これを分解しながら遡っていき、その経験や動態性に関して予め成り立っているものを、原初的な受動的次元にあるその源泉や動機づけに至るまで探究する。これらの分析方法によって、経験の受動的な次元における基本的な構造や法則が析出され、当初は十分に扱われなかった現象、例えば関心の呼び起こしや注意の振り向けが、説明できるようになる (cf. 135)。以上のように、発生的分析では構築と解体を用いて、意識体験の生成が時間的観点から分析されると、ブルジンスカは解釈している。

第2節 発生的現象学における方法論的問題

いくつかの先行研究は、前節で確認した発生的現象学の概要をおおよそ共有したうえで、発生的現象学における方法論の問題に言及している。この問題は、簡潔に言えば、反省における直接的な直観という現象学の基本的な方法が、発生的現象学の課題に対して齟齬をきたす、というものである。このような問題を取り上げている先行研究として、ナミン・リー『エトムント・フッサールの本能の現象学』、榊原哲也『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』、セバスティアン・ルフト「再構築と還元——方法と主観性への問いに関するナトルプとフッサール」、ヴィトルト・プロトカ「静態的分析と発生的分析の隔たりをどうやって埋めるかに関するフッサールの考察」を挙げることができる。これらの先行研究は、発生的現象学において現象学の方法論の枠組みが拡張されると主張している。ただし、この主張は各先行研究において、独自の議論のもとで展開されている。本節では、これらの議論をそれぞれ確認する。

2.1 リーによる解釈

リーは『エトムント・フッサールの本能の現象学』⁷の中で、発生的現象学の課題を詳しく示したうえで、これに関する方法論の問題について論じている。予め簡潔に述べておくと、この議論は概ね次のように再構成できる。発生的現象学の課題には、過去の意識体験および無意識的なものを明示することが含まれているが、それらは、現象学の基本的な方法である反省によっては、直接的に捉えられない。こうした方法論の問題に対してフッサールは、これをいわば回避しうる新たな方法を準備していた。このようなリーの議論を、より詳しく確認していこう。

⁷ Lee, Nam-In [1993]: *Edmund Husserls Phänomenologie der Instinkte* (Phaenomenologica 128), Springer. (中村拓也訳『本能の現象学』、晃洋書房、2017年。) 本節に限り、同書への引用箇所および参照箇所の指示は、原著の頁数、邦訳の頁数の順にスラッシュで区切ってその項数のみ括弧内に入れ、文中に記す。

リーによれば、発生的現象学の課題は次のように二つに大別できる。

一つ目は、現在の習慣的な統覚体系を形成した、過去の一連の意識体験を探究することである (cf. 18-19, 60-61/19, 67)。例えば、或る統覚が初めて形成される幼児期の意識体験 (原創設) を明示することが、その課題に含まれる (cf. 198-199/229-230)。

二つ目は、習慣的体系をもった統覚のそのつどの働きを、ここに潜む無意識的なものに至るまで、探究することである (cf. 18-19, 36, 60-61/19, 39, 67)。ここでの無意識的なものとは、能動的な意識作用に対して潜在的に先立っているものとして、構成の発生的な先行者となっているものを指す (cf. 36, 115-118, 120-121, 165-166/39, 130-133, 137, 191-192)。例えば、フッサールが「原ヒュレー」と呼ぶもの、すなわち、私に与えられていながらも未だ私の能動的な意識作用を触発していない感覚領野が、それにあたる。このような無意識的なものとの連関の中で、そのつどの統覚がどのように働いているのかを明らかにすることが、上の二つ目の課題である。

リーによれば、これらの課題に対してフッサール現象学は、方法論的問題に直面することになる (cf. 65-67, 114-115, 155-156/72-75, 128-129, 180)。リーは次のように論じている。フッサールは当初、今まさに働いている意識体験を反省によって捉えることを、現象学の基本的な方法としていた。というのも、そこで捉えられるものは、必当然的なもの、疑いえない確かなものとして、哲学的認識の基盤となりうるものだからである。ただし、こうした確かさの射程は、意識のまさに働いている生き生きした現在、および、そこで顕在的に現れている意識体験に限られる。すなわち、こうした反省においては、私の過去の意識体験や無意識的なもの、例えば私の幼少期の意識体験や原ヒュレーは、直接的に捉えられない。それゆえ、先述の発生的現象学の課題に取り組むためには、反省という当初の現象学の方法は相応しくなく、これとはまた別の新たな方法が求められねばならない。このようにリーは、発生的現象学における方法論的問題を挙げている。

リーによれば、こうした問題に対してフッサールは、志向的心理学の分析に超越論的エポケーを組み込むという新たな方法によって、対応している。ここでの志向的心理学とは、つねに何かについて働くという意識の志向性を主題として、個別的な意識形態を取りあげ、これの本質を記述する学を指す (cf. 17, 68-69/17, 76-77)。こうした心理学での分析においては、過去の意識体験や無意識的なものが示される (cf. 69, 115, 156/76, 129-130, 180-181)。例えば、私が出会う幼児たちの意識体験が、彼らの表情や身振りのような身体的表れから理解され、これと類比的に、私の幼児期の意識体験が示される。ただしリーによると、こうした志向的心理学の分析においては、世界の現実存在を妥当性の地盤として前提したうえで行われており、このことはフッサールの超越論的立場からして受け入れられない (cf. 65-69/73-77)。というのも、フッサールの超越論的現象学では、認識の可能性の条件として絶対的に疑いえない領分は、構成する意識であり、現実には存在しない可能性を残す構成された世界ではないと、見定められるからである。しかし、そうであるならば、志向的心理学の分析に世界の現実存在の妥当性をひとまず遮断する超越論的エポケーを組み込むことに

よって、その分析は超越論的現象学の基本的な方法論を充たしたものとして受け入れられうる（cf. 67-71, 73/75-79, 81-82）。つまり、そのエポケーを施しさえすれば、志向的心理学が探究する主観性は超越論的現象学が探究する主観性へと転換されるというように、両者には平行関係がある。このようにフッサールは考えた、リーは理解している。そして、そのように志向的心理学を介する方法によってフッサールの発生的分析は展開されたと、リーは解釈するのである。

なお、このような発生的分析が一步一步と段階的に進むことを、リーは際立てている。彼は次のように論じている。発生的観点からすると、或る対象が構成される際には、時間的に先立つものによってこれに後続するものが基づけられるという、発生的基づけの段階がある（cf. 22-23/23-25）⁸。ここでの意識体験を遡行的に分析していくために、一步一步と段階的に進む抽象的な手続きが行われる（cf. 71-78/79-86）。すなわち、まず、反省において直接的に捉えられる意識体験を分析することから始め、ここでの成果を踏まえて、発生的に基づけられている後のものを捨象し、これを発生的に基づけている先のものへと、探究の眼差しを向ける。そして、その先のものを捨象し、これを基づけるさらに先なるものへと探究の眼差しを向け、こうした手続きを一步一步繰り返してゆくことで最終的には発生的始源へ至ろうとする。こうした遡行的な分析を、フッサールは「解体の方法（Methode des Abbau）」と呼んだ。また、このような遡行的方向とは逆に進む構築的分析も可能である（cf. 78/86-87）。すなわち、解体的分析によって明らかになった、発生を基づける諸契機を、時間的進行に沿って段階的に構築していくことで、その発生を完全に理解しようとする分析が、それにあたる。以上のように、「解体」および「構築」という段階的分析によってフッサールは先述の課題に取り組んだと、リーは解釈している。

2.2 榊原による解釈

榊原は『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』⁹の中で、発生的現象学の課題を詳しく示したうえで、これに関する方法論的問題について論じている。予め簡潔に述べておくと、この議論は概ね次のように再構成できる。発生的現象学の課題には、過去における原創設の生成、および、原創設の現在における働きについて明示することが含まれているが、それらは、現象学の基本的な方法である反省によっては、直接的に捉えることができない。こうした方法論的問題に対してフッサールは、歴史的省察としての「遡行的問いの方法」、および、「適切な反省」という方法を呈示することで、その問題をいわば解消しようとしている。ただし、榊原はここでの「遡行的問いの方法」を、現象学的方法の拡張を示唆するものとして論じている。このような榊原の議論を、より詳しく

⁸ リーは、こうした発生的構造とは別に、妥当基づけの構造があることを強調している（cf. 19-30, 77/20-31, 86）。

⁹ 榊原哲也 [2009]：『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』、東京大学出版会。本節に限り、同書への引用箇所および参照箇所の指示は、頁数のみを括弧内に入れ、文中に記す。

確認していこう。

榊原は、とりわけ起源ないし歴史への問いに焦点を当て、原創設に関する発生的分析の課題として次の二つのものを挙げている。

一つ目の課題は、「内在的な意識流や間相互主観的な内的歴史という時間化された次元」において、原創設を遡行的に問い明らかにすることである (cf. 316–317, 414, 429)。榊原はここでの「時間化」をそれほど詳しく規定していないが、これは、対象の意味やこれを捉える意識作用が特定の時間位置といった時間性をもったものとして生成することだ、と考えてよいだろう。したがって上の課題は、言い換えれば、私の内的歴史においてや個人個人（個々のモノイド）を超えた共同的歴史（人類の内的歴史）において、原創設がどのように成り立ったのかを示すことを指す。ここではいわば、過去の意識体験が掘り起こされるのである。

二つ目の課題は、「生き生きした現在における時間化と生き生きした発生の次元」において、原創設を遡行的に問い明らかにすることである (cf. 316–317, 414, 429)。これは簡潔に言えば、原創設としての対象の意味と意味統覚がどのように「時間化」したのかを説明することである。こうした説明は、場合によっては、内的歴史における或る時点の時間化に向けられるが、最終的には、「生き生きした現在における」「(そのつどの) 時間化」に向けられる (cf. 316–317)。というのも、「生き生きした現在」、すなわち、意識がまさに働いている場面においてこそ、あらゆる意味と意味統覚や、内在的時間性や内的歴史の時間化が根源的に生じてくるからである (cf. 317)。これに関して榊原は、「生き生きした現在においては、これまでの原創設と、それによって創設された意味と意味統覚の現在に至るまでのさらなる発生とが、そのつど伝承されており、まさにこのような時間化された獲得物を背景的地平として、それらから触発されることによって、そのつど時間化（「原生起（Urgeschehen）」）が、時間化しつつ時間化される意識性として生起する」と、説いている (cf. 317)。すなわち、生き生きした現在では、これまでのあらゆる原創設や発生がすべて一緒に、いわば同時に機能しており、それゆえ原創設は過去のある時点における一回かぎりのものではなく、そのつどの生き生きした現在において絶えず働いている (cf. 338, 89)。榊原は、こうした事態を「生き生きした発生」と呼び (cf. 317, 338, 89)、これを明示することが二つ目の課題だと理解しているのである。

榊原はこれらの課題の内、とりわけ二つ目の課題に関して、方法論的問題を取り上げている (cf. 288–290, 377–378)。彼はこれを次のように呈示している。その方法論的問題とは、反省の「後から（nachträglich）」という性格に起因するものであり、こうした問題は、ヘルトの研究によってよく知られるようになった。すなわちこの研究によると、反省とは意識体験をいつも「後から覚認すること（Nachgewahren）」であり、この「後から」という性格のために、現象学における反省的分析は、意識が今まさに働いているという最も核心的な場面、生き生きした現在を、未解明なものとして残

してしまう¹⁰。もしこの解釈を全面的に認めれば、生き生きした現在という事象を捉えることはできず、ひいては生き生きした発生を突きとめることもできなくなる。このように榊原は、発生的現象学における方法論の問題を挙げ、これを現象学にとって重大な問題として受け止めている。

榊原によれば、このような問題に対してフッサールは、1930年代の草稿の中で、「適切な反省」という方法をもち出して対応している。これについて榊原は、次のように論じている。「適切な反省」とは、今まさに機能する私を感じし続けていることに基づいて、この機能する自我を後から遡及的に推論することである (cf. 390–391)。たしかに反省は、生き生きした現在において機能する私自身を、いつも「後から」捉えるものであり、別言すれば、反省によって捉えられる私は、時間化するものではなく、いつもすでに時間化されたものである (cf. 382–383)。しかしながら、生き生きした現在や生き生きした発生について、その本質的な構造ないし形式を明示することは、適切な反省において可能である。つまり、自我はいつも機能する自己を感じしており、この自己感触に基づいて、生き生きした現在において機能する自我については、「必自然的」な仕方でも遡及的に推論されうる (cf. 391, 393–397, 410)。ここでの「必自然的」とは、認識論的には「別様には考えられない」、存在論的には「別様では在りえない」という、両義的なことを意味する (cf. 394)。これは簡明に言い換えれば、必自然的明証性をもつこと、すなわち、後から疑わしくなる可能性が予め排除された確かさをもつことを指す (cf. 187)。以上のように、フッサールは適切な反省によって上の方法論の問題に対応していると、榊原は解釈している。

さて、榊原によると、既述の一つ目の課題、すなわち「内在的な意識流や間相互主観的な内的歴史という時間化された次元」において原創設を遡行的に問い明らめることに対しては、フッサールは歴史的省察としての「遡行的問いの方法」によって分析している (cf. 428–429)。ここでの「遡行的問いの方法」とは、いま現に成り立っている意味や統覚から遡って、その原創設がどのようにして成立しなければならなかったのかを、問い明らめようとすることである (cf. 312, 432–434)。すなわちここでも、適切な反省という方法においてと同様に、私のいま現に成り立っている意識体験に基づいて、ここから必自然的な仕方でも遡及的に推論することが、その方法の核心にある (cf. 426–427, 440)。こうした方法によって、私の内的歴史における原創設についても、また、個々のモナドを超えた共同的歴史における原創設についても、分析される (cf. 335–336, 432–434)。前者の場合、例えば「他者」の原創設について言えば、いま現に成り立っている他者についての意味と統覚に基づいて、これが私の内的歴史においてどのように初めて成立しなければならなかったのかを遡行的に問われる。そして、他者の原創設は、両親のような最初の他者による呼び覚ましによって、自他の意味上の分離が初めて生じること、すなわち、「私」である自我と、「(私ではない) 他者」という二つの意味が同時に初めて成立することとして、説明される。また後者の場合、例えば「哲

¹⁰ これについての参照として、榊原はHeld [1966, 94–122] を指示している (cf. 377–378)。

学」の原創設について言えば、私にいま現に伝承されている哲学に基づいて、これが歴史においてどのように初めて成立しなければならなかったのかが遡行的に問われる。そして、哲学の原創設は、「他の諸文化との出会い」や「驚き (*θαυμάζειν*)」等によって動機づけられたものとして、説明される。

榊原はこうした方法を、現象学的方法の拡張を示唆するものとして受け取っている。上述のようにその方法は、「原創設がどのようにして成立しなければならなかったのか」と、必当然的に推論するものであった。ここでの必当然性に着目して、榊原は次のように解釈している。フッサールにおいて必当然性は、彼の思索の進展とともに深化しており、「適切な反省」が呈示された際には、超越論的主観性の本質的な構造ないし形式について、「別様には考えられない」、「別様では在りえない」という意味で呈示された (cf. 425–426)。つまり、ここでの必当然性の射程に、超越論的主観性の内実¹⁾は明示的に含まれてはいなかった。ところが、歴史的省察としての「遡行的問いの方法」は、原創設における意味内容を推論によって問い明らめようとするものであり、ここでの推論の必当然性は、超越論的主観性のそのつどの内実²⁾についても射程に含めたものとなっている (cf. 426–427)。たしかに、そこで遡行的に推論された内実³⁾は、それ自体として直接的に捉えられるものではない。しかし、いま現に成り立っている意味や統覚に基づいた仕方⁴⁾でその内実が推論されているならば、ここでの推論は必当然性をもつと、フッサールは見定めたのである。このように必当然性という概念は深化し、それ自体として直接的に捉えられないものに関しても現象学的分析の射程に含まれるようになったと、榊原は解釈している。なお、榊原はこうした方法論的拡張に関して批判的な考察を呈示してはいるが、その拡張自体が現象学の致命的な欠陥になるとは考えていないようである (cf. 441–444)。

2.3 ルフトによる解釈

ルフトは「再構築と還元——方法と主観性への問いに関するナトルプとフッサール」¹¹⁾の中で、発生的現象学の課題を詳しく示したうえで、これに関する方法論的問題について論じている。予め簡潔に述べておくと、この議論は概ね次のように再構成できる。発生的現象学の課題には、主観性の受動的な次元を明示することが含まれているが、この次元は、現象学の基本的な方法である反省によっては、直接的に捉えることができない。こうした方法論的問題に対してフッサールは、「解釈」という再構築的な方法を新たに採用し、現象学の方法論的枠組みを拡張することで対応した。このようなルフトの議論を、より詳しく確認していこう。

ルフトによれば、発生的現象学の課題は、主観的な生の受動的な次元を明示することである。こ

¹¹⁾ Luft, Sebastian [2016]: “Reconstruction and Reduction: Natorp and Husserl on Method and the Question of Subjectivity,” in: *Meta: Research in Hermeneutics, Phenomenology, and Practical Philosophy* vol. VIII, no. 2, 326–370. 本節に限り、同論文への引用箇所および参照箇所の指示は、頁数のみを括弧内に入れ、文中に記す。

れに関して彼は、次のように論じている。フッサールの超越論的現象学は、具体的な主観性ないし意識を探究する (cf. 329–330)。そのためには、主観性の受動的な次元にも焦点が当てられねばならない。というのも、主観性はその具体的な在り方においては、重層的で動的な構造をもっており、その深層に受動的な次元が潜んでいるからである (cf. 352–353)。この次元は、今における主観的な生に先行するもの、すなわち、今まさに働いている意識に対して、論理的にだけでなく時間的に先行するものである (cf. 353)。これをフッサールは、潜在性、無意識的なもの、「眠っている」主観性などのような、さまざまな概念を用いて表している (cf. 353)。こうした次元を明示することこそ発生的現象学の課題だと、ルフトは解釈しているのである。

しかし、こうした課題に取り組むにあたっては、フッサール現象学の方法論的原理に照らして問題が生じると、ルフトは指摘している。フッサールは『イデーン I』において、どんな現象学的分析も直接的な直観において捉えられるものに基づかねばならないことを、「あらゆる原理中の原理」に据えている (cf. 354; III/1, 51)。ルフトによると、この原理はフッサール現象学にとってのいわば「聖杯」であるが、しかしながらこうした方法論的枠組みでは、主観的な生の受動的な次元を明らかにすることができない (cf. 352–354, 356)。というのもこの次元は、既述のように、今の意識体験に先立つもの、主観的生における隠れた深層であり、反省における直接的な直観によって捉えることはできないものだからである。反省において直接的に捉えられる意識体験は、あくまで今において能動的に働いているものだけである (cf. 340, 343, 352)。このように、発生的現象学の課題と現象学の方法論的原理との間には齟齬があると、ルフトは論じている。

ルフトによれば、こうした問題に対してフッサールは、遡行的な「解釈 (interpretation)」を方法として導入することで、対応している (cf. 352–355)。これに関してルフトは、次のように論じている。その遡行的な「解釈」とは、能動的に働く意識体験を反省において直接的に捉えたうえで、ここから遡行的ないし再構築的に、その主観性の受動的な次元を説明するものである。この次元の具体的な現象は非直観的なものである以上、これについてフッサールはそうのように回顧的に解釈するほかなかった。つまり、発生的現象学において彼は、直観の概念があまりに狭いことを暗黙裡に認め、直観的に明証な現象の直接的な記述だけでなく、解釈としての再構成的あるいは遡行的な分析を受け入れることで、現象学的分析の射程を広げたのである。こうした方法論的変様をフッサールは連続的な発展として呈示するが、それはむしろ、非連続的な転換である。以上のようにルフトは、発生的現象学において方法論的な拡張ないし転換があったと、解釈している。

なお、上述の方法をフッサールが採用するにあたっては、ナトルプからの影響があったことを、ルフトは詳しく跡づけている。しかし、本論での整理における主眼は、フッサールの発生的現象学とその方法論の問題にあることから、その跡づけにまでは立ち入らない。

2.4 プロトカによる解釈

プロトカは「静態的分析と発生的分析の隔たりをどうやって埋めるかに関するフッサールの考察」¹²の中で、発生的現象学の課題を詳しく示したうえで、これに関する方法論の問題について論じている。予め簡潔に述べておくと、この議論は概ね次のように再構成できる。発生的現象学の課題には、無意識的なものを明示することが含まれているが、それは、直接的な直観よっては、捉えることができない。こうした方法論の問題に対してフッサールは、具体的な意識作用が成立する条件を再構築する逆行的な説明を、超越論的方法として新たに組み込むことで対応している。このようなプロトカの議論を、より詳しく確認していこう。

プロトカによれば発生的現象学の課題とは、主観性の最低段階を成す無意識的なものから高次の能動的な意識の働きが生じる動的な過程について、明らかにすることである。これに関して彼は、次のように論じている。フッサールは、意識がもつ統一的な主観的構造を「モナド」と呼び、この構造に二つの層があると見定めている (cf. 134-135)。一つの層は、「意識的な」層、すなわち、能動的に働く意識に関する構造である。もう一つの層は、「無意識的な」層、すなわち、能動的な意識にとって受動的に予め与えられているものに関する構造である。これら二つの層は、決して対立するものではない (cf. 135)。つまり、受動的に予め与えられる無意識的なものに基づいてはじめて能動的な意識が働いており、このように両者は意識の動的な一連の過程を成している (cf. 139-140)。ここでの動的な過程を明らかにすることこそ、発生的分析の基本的課題だと、プロトカは解釈しているのである (cf. 139-142)。

プロトカは上の課題がさらに、第二、第三の発生的な課題へつながると理解している (cf. 141-142)。第二の課題とは、モナドの「展開 (development)」に関するものである。ここでは、どうやってモナドが個性をもったものとして、時間的流れの中で統一的に構成されていくのかが、探究される。第三の課題とは、客観的な世界、すなわち「私たちの」世界に関するものである。ここでは、どうやって世界が「私たちの」世界として構成されるのか、どうやってその世界が統一された自然として構成されるのか、どうやって複数のモナドにとって「同じ時間」が構成されるのか、これらが探究される。

以上の課題に対しては、フッサールの当初の方法では取り組むことができないと、プロトカは指摘している (cf. 139-140)。プロトカは次のように論じている。その当初の方法とは、静態的分析の方法であり、これは、直接的な直観において捉えられているもの、すなわち反省において直接的に見出されるもののみに基づいて、分析的記述を行なう方法である。この分析では、発生における動的な過程は明らかにされえない。というのもこの過程は、反省において直接的に捉えられない、

¹² Plotka, Witold [2022] “Husserl on How to Bridge the Gap Between Static and Genetic Analysis,” in: *Forum Philosophicum* Vol. 27 issue 2, Philosophy Documentation Center, 129-148. 本節に限り、同論文への引用箇所および参照箇所の指示は、頁数のみを括弧内に入れ、文中に記す。

非自明的なものだからである。つまり、静態的分析では、モナドの意識的な層は捉えられるが、モナドの無意識的な層は捉えられないため、これら二つの層の動的連関である発生的な過程は、未解明のままに残されるのである。このように発生的現象学の課題は静態的分析の方法では取り組むことができず、これとは別の方法が求められると、プロトカは論じている。

プロトカによるとフッサールは、発生的現象学の課題に対しては、具体的な意識作用の成立する条件を再構築する遡行的な説明によって、取り組んでいる (cf. 138–140, 142–143)。既述のように、モナドの無意識的な層は、直接的な直観によって捉えることはできないが、モナドの意識的な層は、反省において直接的に捉えられる。フッサールはこの意識的な層の成立した条件を問うことで、無意識的なもの、そして発生における動的な過程を、遡行的に辿って明示しようとしていると、プロトカは解釈しているのである。ただしプロトカによると、ここでの条件は、自然的な因果関係としての原因ではない (cf. 140–141)。というのも、分析の主題となる意識は、自我極とその内容から成る構造と考えられたかぎりのもの、すなわち「純粹意識」であり、自然的な事物と同列に扱われるようなものではないからである (cf. 133)。

プロトカはこうした分析の方法を、拡張された超越論的方法の一例として、受けとめている (cf. 140–141)。彼によるとここでの「超越論的」とは、純粹意識ないしモナドに関して、その成立の最終的な条件を問うことを指す。たしかに、発生的分析の方法は、直接的な直観において捉えられたもののみを記述するという、当初フッサールが据えた方法とは異なり、遡行的な考察を含むものである。しかし、反省において直接的に捉えられる、いま現に成り立っている意識体験にあくまで基づき、この意識体験の成立条件を問い明らめようとするかぎり、ここでの発生的分析は超越論的な方法にあたると、プロトカは理解するのである。

第3節 先行研究の解釈に関する検討の余地

本節では、ここまでの整理を踏まえて、先行研究の解釈に関して改めて検討すべき点を示す。

その一つとして挙げることができるのは、発生的現象学は超越論的現象学の当初の方法論的枠組みに変更を求めるのかどうか、である¹³。フッサールは、『イデー I』や『デカルト的省察』といった公刊著作において、超越論的現象学の方法論的枠組みを明示している。すなわち、どんな認識や主張も直接的な直観に基づかねばならないという原理、言い換えれば、反省における必当的明証

¹³ これの他には、榊原が扱った方法論の問題についても、検討の余地がある。その問題は、反省の「後から」という性格に起因するものであった。つまり、反省は意識体験をいつも後から捉えるものであるために、現象学における反省的分析は、今まさに働いている意識を未解明なものとして残してしまうとされる。榊原は、そうした「後から」という性格を認めたくて、その問題にフッサールが「適切な反省」によって対応したと論じていた。しかし、その「後から」という性格はそもそも、方法論の問題を必ずしも引き起こすわけではないのではないだろうか。こうした観点から、その性格に関して検討の余地がある。こうした検討を展開したものとして、佐藤 [2019]、佐藤 [2021] を参照。

性を認識や主張の基盤とすることこそ、現象学の根底的な立場として強く主張され、こうした直観の原理ないし必然的明証性が、現象学の方法論的枠組みとして見定められた (cf. I, 52–56; III/1, 43, 51, 138–139, 169)。前節で確認したように先行研究は、こうした当初の方法論的枠組みが発生的現象学では拡張ないし転換されると、論じていた。しかし、ルフトも指摘するように、フッサール自身はそうした拡張や転換を明示的に認めてはいない (cf. Luft [2016, 355])。このことを鑑みると、フッサールが当初の方法論的枠組みを変更したという解釈については、疑念が生じる。フッサールは、その枠組みをそう易々と変更させるだろうか。その枠組みをあくまで保持した中で発生的現象学が打ち立てられたとは、解釈できないのだろうか。こうした解釈の試みが、検討の余地として残されているように思われる。

このような検討に取り組むにあたって、まず焦点が当てられるべき点は、発生的現象学の課題についてである。前節で確認したように先行研究によれば、過去の意識体験や無意識的なものを明示することが、発生的現象学の課題に含まれており、それらは反省における直接的な直観では捉えられないもの、必然的明証性において捉えられないものとされる。たしかに、そのつどの私の具体的な意識体験が、これまでの経験に基づく習慣性を背景にして生成し、また、無意識的なもの（受動的で潜在的なもの）との連関において成り立っているならば、こうした意識体験を十分に理解するためには、過去の意識体験や無意識的なものを問い明らめることが必要であろう。しかし、こうした課題は、十分に明確なかたちで設定されているのだろうか。過去の意識体験について言えば、そのつどの私の具体的な意識体験を十分に理解するために、過去の意識体験に関して何がどこまで明示されるべきなのだろうか。ここで求められるその時間的な射程や内容的な射程が、その目的に照らして明確にされておくべきであろう。また、無意識的なものについて言えば、これが意識の深層において働いていることは、そもそもどうやって指し示されているのだろうか。それが確かなこととして指し示されておかねば、無意識的なものの探究は空疎なものになってしまう。

以上の検討は、フッサールの草稿ではなく公刊著作に重きを置くものである。彼は現象学の方法論的枠組みについては公刊著作の中で明示しているが、発生的現象学についてはそうではなく、これに関する論述の多くは草稿の中にある。それゆえ、彼の発生的現象学を解釈するためには、そうした草稿を参照することが必要になる。この際に解釈上の問題が生じるのは、公刊著作での論述と草稿での論述とが一見して対立している場合である。ここでどちらに重きを置くのかによって、解釈の方針が分かれる。公刊著作の論述をフッサールの公式見解として重く受け止める場合、それをあくまで優先的に保持し、草稿での論述は、公刊著作の論述に適応するように修正的に解釈されたり、試験的思索として脇に置かれたりすることになる。これに対して、草稿をフッサールが実際に書き残したものとして重く受け止める場合、ここに彼の思索の変化ないし深化を見出し、これに基づいて公刊著作の彼の見解は修正されることになる。これら二つの方針は、どちらが正しいかが決められねばならないものではなく、解釈上の立場の違いによるものであり、どちらも可能なフッサー

ル解釈として試みられるべきであろう。しかし、先行研究の多くは後者の方針をおおよそ取っており (cf. Kern [1989, 1-2 (邦訳、2-3 頁)], Lee [1993, 3-4 (邦訳、1-2 頁)], 榊原 [2009, 334-339], Plotka [2022, 130, 132]), 前者の方針をとったものは、まだそれほど十分に試みられていないように思われる。したがって、公刊著作で呈示された現象学の方法論的枠組みを重視する上で挙げた検討は、そうした隙間を埋めるものでもある。

こうした検討は、発生的現象学を明確にするだけでなく、フッサールの超越論的現象学の体系的全体像をより精確に描き出すことにもつながろう。というのもその検討は、フッサールの超越論的現象学の構想を改めて精査したうえで、その中に発生的現象学を位置づけようとするものだからである。

おわりに

本論では、発生的現象学に関する先行研究を整理し、発生的現象学を明確にするために検討すべき点を浮き彫りにした。これは、先ほど確認したように、発生的現象学が超越論的現象学の枠組みに変更を求めるのかどうかにあった。

最後に、上の検討の展望について、簡潔に述べておきたい。

先行研究の見解と対比的に、発生的現象学は超越論的現象学の方法論的枠組みをあくまで保持した中で打ち立てられたものだとして解釈しうる可能性は、十分に残されている。例えば、無意識的なものに関する先行研究の議論に焦点を当てると、次のようになる。既述のように先行研究は、直接的な直観では捉えられない無意識的なものの明示化が、発生的現象学の課題に含まれていると論じた。しかし、その無意識的なものが意識の深層にあることが確かなこととして指し示されておかねば、無意識的なものの探究は空虚なものになってしまうのであった。では、それはどうやって指し示されうるのだろうか。結局のところ、無意識的なものの存在も、直観の原理を充たす仕方で基礎づけられるほかにないと思われる。というのも、無意識的なものであっても、直接的な直観において捉えられうるものでなければ、その存在を証示することはできないからである。つまり、無意識的なものの明示という課題も、超越論的現象学の方法論的枠組みの中で設定されねばならない。この点を踏まえると、フッサールの直観が対象とするものの射程はそもそも想定よりも広いということを、先行研究は受け入れざるをえず、この場合、その課題と現象学の方法論との間に、必ずしも齟齬が生じるというわけではないことになるのではないだろうか。このような展望に関して、稿を改めて取り組みたい。

文献

Brudzińska, Jagna [2021]: “The Genetic Turn: Husserl’s path toward the concreteness of experience,” in: *The Husserlian Mind*, Hanne Jacobs (ed.), Routledge, 129–139.

- Kern, Iso [1989]: “Statische und genetische Konstitution,” 7. Kapital, in: *Edmund Husserl. Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner Verlage, 1. Aufl., 1989. 2. Aufl., 1996. (千田義光・鈴木琢真・徳永哲郎訳『フッサールの思想』「第七章 静態的構成と発生的構成」、哲書房、1994年、279–293。)
- Held, Klaus [1966]: *Lebendige Gegenwart. Die Frage nach der Seinsweise des transzendentalen Ich bei Edmund Husserl, entwickelt am Leitfaden der Zeitproblematik*, Nijhoff. (新田義弘・谷徹・小川侃・斎藤慶典訳『生き生きした現在——時間と自己の現象学』、北斗出版、1997年。)
- Husserl, Edmund: *Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Nijhoff/Kluwer/Spinger, 1950ff. (巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で指示する。)
- Lee, Nam-In [1993]: *Edmund Husserls Phänomenologie der Instinkte* *Phaenomenologica* 128), Springer. (中村拓也訳『本能の現象学』、晃洋書房、2017年。)
- Luft, Sebastian [2016]: “Reconstruction and Reduction: Natorp and Husserl on Method and the Question of Subjectivity,” in: *Meta: Research in Hermeneutics, Phenomenology, and Practical Philosophy* vol. VIII, no. 2, 326–370.
- Plotka, Witold [2022] “Husserl on How to Bridge the Gap Between Static and Genetic Analysis,” in: *Forum Philosophicum* Vol. 27 issue 2, Philosophy Documentation Center, 129–148.
- Zahavi, Dan [2003]: *Husserl's Phenomenology*, Stanford University Press. (工藤和男・中村拓也訳『フッサールの現象学』、晃洋書房、2003年。)
- 門脇 俊介 [1987]: 「現象学における「動機づけ」の概念」、『山形大学紀要』(人文科学) 第11巻第2号、山形大学、37–60頁。
- 榊原 哲也 [2009]: 『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』、東京大学出版会。
- 佐藤 大介 [2019]: 「反省の問題は本当に問題なのか——フッサール初期時間論の再検討」、『哲学』第70号、知泉書館、220–234頁。
- 佐藤 大介 [2021]: 「自我に対する現象学的反省の有効性——フッサールにおける自我論の再検討に向けて」、『哲学』第72号、知泉書館、115–126頁。

